

論文要旨

言語少数派の子どもの生活体験を基盤とする概念発達の様相

—二言語使用学習のヴィゴツキー理論に基づく分析—

なめかわ
滑川 恵理子

本研究は、言語少数派の子どもの生活を通じて得られた知識や体験などを基盤とする学習において、概念がどのように発達するのかを明らかにすることを目的とした。教科学習では子どもの生活文脈とは異なる概念の理解や抽象的思考が求められるため、「わからないままあきらめてしまう」「表面的に理解する」「丸暗記する」といった安易な理解にとどまってしまうことが起こり得る。言語少数派の子どもの場合、生活文脈と学校文脈の隔たりの中に言語的・文化的隔たりも内包されているため、さらに困難を抱えることが予想される。本研究は、安易な理解ではない「身をもって理解すること」とはどのようなものかを探るため、ヴィゴツキー理論を参照し、生活体験を基盤とする概念発達（生活体験と抽象概念が統合されていく過程）の様相を発達の最近接領域におけることばのやり取りを注視しながら質的に分析することを試みた。

言語少数派の子どもに対しては、これまでもいわゆる母文化（母国の文化・習慣、歴史など）が教科学習に活かされてきたが、本研究では子どもにとってより身近な、その子どもや家族に固有の文化的・歴史的背景に関わる生活体験に着目した。彼らの生活体験は、母語を介して母国や家庭で蓄積されたものと、日本語を介して日本の学校などで蓄積されたものが想定される。そこで、母語と日本語の二言語を介して教科学習を行う「教科・母語・日本語相互育成学習モデル（略称：相互育成学習）」に基づく実践を分析した。対象者は中国語を母語とする二人の小学生で、それぞれ約4年間相互育成学習の学習支援を受けた。分析する事例の特徴は、子どもの母親が母語話者支援者として継続的に参加し、日本人支援者との協働によって学習支援を進めたことにある。

研究1では、子どもSを対象に、家庭での生活体験および日本の学校での体験に着目した。分析の結果、抽象概念が生活体験に裏打ちされて理解される過程が認められた。また、子どもの概念理解は最初狭いものだったが、大人の働きかけと子どもの応答が重ねられる中で概念が変化し広がっていくという概念発達の様相が可視化された。その過程では、子どもが母親の援けを得るために母語に切り替え、自然の流れで日本語に戻るといったやり取りが見られ、二言語が融合した概念発達の可能性が示された。子どもが発達の領域を広げるためには大人の働きかけが不可欠であるが、子どもは誘導されるばかりではないことも明らかになった。

研究2では、子どもYを対象に、母国での体験を基盤に作文を書く過程における口頭のやり取りに着目した。分析の結果、子どもの頭の中にある、ことばになっていない体験が、最も近い概念をもつ語や表現が選択されることによって一般化（抽象化）されるという概念発達の様相が可視化された。その過程で

は、子どもの独力による課題解決の部分と支援者から援けを得て解決している部分の両面がみられた。概念発達の源が子どもの体験の中にあるため、子どもが支援者に働きかけ支援者から最も近い概念をもつ表現を引き出すという子どもの主体的な会話参加が見られた。また、体験を想起するときに子どもが自然に母語に切り替え、その後日本人支援者との日本語のやり取りに戻るといふ、境界線のないような二言語使用の様子が観察された。

研究3では、S親子・Y親子を対象に、家庭での体験に着目した。分析の結果、抽象概念「愛（家族の愛情）」が生活体験（親子で日常的にやり取りされている具体的なことばや行為）に裏打ちされて理解される過程が可視化された。これは、親子の触れあいの体験を基盤とする、温かな「感情」を伴う概念発達の様相と言える。その過程では、子どもの反応と出会うことによって母親としての豊かなことばの力が引き出されるという親子間のことばの相互作用がみられた。

以上のように、相互育成学習において、表面的な理解ではない、生活体験に根差した「身をもって理解すること」が例証された。教育現場では子どもに抽象概念をより早くより多く理解させることが成果だと考えがちだが、抽象概念の発達を急がせることなく、まず心豊かな生活体験を積むことが発達の基盤を創ると考えられる。生活体験は抽象概念と結びつき捉え直されることによって新しい意味が付与される。言語少数派の子どもがもつ多様性の中でも、本研究は子どもやその家族に固有の文化的・歴史的背景が概念発達の基盤となることを示した。これは彼らが自らの言語と文化の価値を再確認する契機となり得る。それと同時に、家庭での何の変哲もない日常生活の価値を高めることにもなる。親が子どもと心豊かに体験を共有することが教育的貢献となるのである。本研究は特に母親の教育参加の意義を明らかにした。また、言語少数派の子どもの特性を踏まえ、相互育成学習のような二言語を介して他者との交流を十分にもつことができる学習環境を創ることの必要性と重要性が再確認された。さらに、これまでの相互育成学習を発展させたものとして「言語少数派の子どものための母語と日本語が融合した教科学習モデル」を提案した。